

## 博士論文(要約)

論文題目 高句麗瓦の研究

氏名 朱 洪奎

# 目次

序論 高句麗瓦研究の現状と課題	1
一. 高句麗史と瓦研究	1
二. 高句麗考古学における瓦研究の有効性	5
三. 高句麗の瓦をめぐる議論	6
四. 研究目的と方法	8
五. 本研究の構成	9
第一章 高句麗瓦の特徴	10
一. 高句麗の瓦に関する既往の調査	10
二. 問題の所在	12
三. 高句麗瓦の特定	13
四. 高句麗瓦と特定できる資料の実例	15
(一) 高句麗の古墳から出土する瓦	15
(二) 高句麗と関連性が認められる銘文がある瓦	20
(三) 高句麗の瓦と技術的属性が一致する集安地域及び平壤地域出土の瓦	21
五. 小結	32
第二章 高句麗軒丸瓦に関する研究	33
一. 先行研究	34
二. 銘文により時期判断が可能な軒丸瓦	37
三. 紋様の特徴により時期判断が可能な軒丸瓦	42
(一) 輻線蓮華紋軒丸瓦	43
(二) 獣面紋軒丸瓦	51
(三) 忍冬紋軒丸瓦	53
(四) 平面形重弁蓮華紋軒丸瓦	55
(五) 平面形単弁蓮華紋軒丸瓦	56
四. 紋様の特徴により時期判断が可能な軒丸瓦における技術的属性の消長	57
五. 紋様の特徴により時期判断が可能な軒丸瓦の技術的属性の連動	62
六. その他の高句麗軒丸瓦に関する時期の特定	64
七. 高句麗の軒丸瓦の消長	89

八. 小結	91
<b>第三章 軒丸瓦からみる高句麗遺跡の年代</b>	<b>93</b>
一. 先行研究	93
二. 軒丸瓦からみる高句麗建築址の造営時期	94
(一) 国内城	94
(二) 東台子遺跡	97
(三) 丸都山城	99
(四) 大城山城	101
(五) 清岩里寺址	103
(六) 定陵寺址	105
(五) 元五里寺址	109
三. 軒丸瓦からみる高句麗古墳の造営時期	110
(一) 禹山三三一九号	111
(二) 西大塚	114
(三) 禹山九九二号	116
(四) 麻線二一〇〇号	118
(五) 千秋塚	120
(六) 太王陵	122
(七) 將軍塚	125
(八) 禹山二一一二号	126
(九) 上活龍五号	127
(十) 漢王墓	129
四. 高句麗の軒丸瓦からみる安鶴宮遺跡の造営時期	131
五. 小結	140
<b>第四章 高句麗平・丸瓦に関する研究</b>	<b>142</b>
一. 先行研究	142
二. 平・丸瓦が出土する高句麗の古墳	143
(一) 麻線二三七八号	143
(二) 山城下三六号	144
(三) 麻線六二六号	146

(四) 七星山八七一号	147
(五) 臨江塚	149
(六) 禹山二一一〇号	151
(七) 七星山二一一号	152
(八) 禹山五四〇号	154
三. 高句麗平・丸瓦の特徴と変遷	156
四. 小結	160
<b>第五章 高句麗における瓦の展開</b>	<b>162</b>
一. 高句麗瓦Ⅰ段階	162
二. 高句麗瓦Ⅱ段階	164
三. 高句麗瓦Ⅲ段階	166
四. 高句麗瓦Ⅳ段階	169
三. 高句麗瓦Ⅴ段階	172
四. 小結	176
<b>結論-本研究のまとめと展望</b>	<b>178</b>
<b>註</b>	<b>184</b>
<b>図の出典</b>	<b>197</b>
<b>文献目録</b>	<b>207</b>

本論文は5年以内に単行本の形で出版予定です。

## 文献目録

### 日本語(五十音順)

#### 【あ行】

- 会津八一 1958 「東洋美術史講義 三」『会津八一全集』2, 中央公論社 354-456 頁
- 東潮 1993 「朝鮮三国時代における横穴式石室墳の出現と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』47, 国立歴史民俗博物館 1-154 頁
- 1997 『高句麗考古学研究』, 吉川弘文館
- 2009 「高句麗王陵と陵園制-国内城～平壤城時代-」 『高句麗王陵研究』, 동북아시아역사재단 145-195 頁
- 東潮・田中俊明 1995 『高句麗の歴史と遺蹟』, 中央公論社
- 井内功 1986 「高句麗の鬼面紋屋瓦」『鬼面紋瓦の研究』, 井内古文化研究室 17-40 頁
- 1991 『朝鮮瓦埴研究史』, 井内古文化研究室
- 井内功編 1976a 『朝鮮瓦埴図譜Ⅱ高句麗』, 井内古文化研究室
- 1976b 『朝鮮瓦埴図譜Ⅵ高麗』, 井内古文化研究室
- 1981 『朝鮮瓦埴図譜Ⅶ総説』, 井内古文化研究室
- 井内潔 1972 「高句麗最古の鎧瓦とその遡源」『井内古文化研究室報』9, 井内古文化研究室;再録井内古文化研究室刊 1982 『古代瓦研究論誌』, 井内古文化研究室 138-148 頁
- 1976 「高句麗の半瓦当屋瓦」『井内古文化研究室報』15, 井内古文化研究室;再録井内古文化研究室刊 1982 『古代瓦研究論誌』, 井内古文化研究室 259-272 頁
- 池内宏 1951 「高句麗の建国伝説と史上の事実」『満鮮史研究・上世篇』, 祖国社 83-108 頁
- 池内宏・梅原末治 1938 『通溝 上』, 日満文化協会
- 尹国有 2001 「高句麗瓦当の研究」『名城大学教職課程部紀要』34, 名城大学教職課程部 127-143 頁
- 諫早直人 2008 「古代東北アジアにおける馬具の製作年代-三燕・高句麗・新羅-」『史林』91, 史学研究会 1-40 頁
- 石田茂作 1930 『古瓦図鑑』, 大塚巧芸社
- 1936 『飛鳥時代寺院址の研究』, 聖徳太子奉賛会
- 1941 「古瓦より見た日鮮文化の交渉」『仏教考古学論叢 考古学評論第三輯』, 東京考古学会 1-27 頁
- 石橋茂登 2014 「大陸文物の受容と型式的変化をめぐる考察」『型式論の実践的研究Ⅱ』276, 千葉大学大学院人文社会系研究科 133-139 頁
- 井上秀雄 1977 「高句麗の祭祀儀礼」『古代東アジア史論集 上巻』, 吉川弘文館 107-137 頁
- 井上和人 2005 「渤海上京竜泉府形制新考」『東アジアの都城と渤海』, 東洋文庫 71-110 頁
- 今津啓子 1988 「九州大学所蔵の高句麗系瓦・埴について」『古代文化』40-7, 古代学協会 28-32 頁
- 上原真人 1997 『歴史発掘⑩ 瓦を読む』, 講談社
- 上田睦 1999 「高句麗系軒丸瓦と渡来系氏族-出土瓦からみた河内の古代寺院と氏族3」『瓦衣千年: 森郁夫先生還暦記念論文集』, 森郁夫先生還暦記念論文集刊行会 90-107 頁。

梅原末治 1938 「東亜の古瓦について」『総合古瓦研究』鶴故郷舎 1-32 頁；再録 『支那考古学論攷』，弘文堂書房 453-487 頁

———1946 『朝鮮古代の文化』，高桐書院

梅原末治・藤田亮策編 1966a 『朝鮮古文化綜鑑』3，養徳社

———1966b 『朝鮮古文化綜鑑』4，養徳社

E・Chavannes 1908 「Les Monuments de L'ancien Royaume Coreen de Kao-Keou-Li」  
『Toung Pao』vol. IX；再録 平山和巳 訳 1942 「東亜の古瓦について」『収  
書月報』73，満鉄奉天図書館 7-17 頁

太田静六 1971 「高句麗系瓦の源流と其影響」『考古学雑誌』57-2，考古学会 26-55 頁

大脇潔 2005 「老北京胡同薈紀行—東アジアにおける軒平瓦の変遷—」『古代摂河泉寺院論攷集』2，摂河泉  
古代寺院研究会 1-84 頁

岡村秀典 1984 「前漢鏡の編年と様式」『史林』67-5，史学研究会 1-41 頁

———1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』55，国立歴史民俗博物館 39-82 頁

岡村秀典・向井佑介編 2007 「北魏方山永古陵の研究—東亜考古学会 1939 年収集品を中心として—」『東方  
学報』80，京都大学人文科学研究所 71-150 頁

小場恒吉ほか 1935 『楽浪王光墓』，朝鮮古蹟研究会

#### 【か行】

上條耿之介 1981 『日本文様事典』雄山閣

韓建華(橋本裕行訳) 2006 「洛陽地区獣面文瓦当の類型と分期」『橿原考古学研究所紀要 考古學論攷』29，  
橿原考古学研究所

金誠龜・森郁夫 2008 『日韓の瓦』，帝塚山大学出版会

洪淳昶 1992 『韓国古代の歴史』，吉川弘文館

国立歴史民俗博物館 2006 『瓦コレクション』，国立歴史民俗博物館

駒井和愛 1965 『楽浪郡治址』，東京大学文学部

小林行雄 1965 『古鏡』，学生社

近藤番一 1982 「瓦の範と瓦当」『考古学論考』，平凡社 615-641 頁

#### 【さ行】

早乙女雅博 2000 『朝鮮半島の考古学』，同成社

———2010 『新羅考古学研究』，同成社

佐原真 1972 「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』58，考古学会 30-72 頁；再録 佐原真著，金関恕・春成秀爾編 2005  
『佐原真の仕事 2 道具の案内』，岩波書店

———2007 「幡枝窯跡の瓦」『史林』90-3，史学研究会 64-100 頁

申滢植 2009 『韓国の古代史』，六一書房

朱洪奎 2010a 「瓦から見た集安地域高句麗積石塚の年代再検討」『史葉』3，加藤建設株式会社学術奨励助  
成金事務局 9-20 頁

———2010b 「高句麗積石塚出土卷雲文瓦の年代再検討」『古文化談叢』64，九州古文化研究会 201-223 頁

———2011 「早稲田大学會津八一記念博物館所蔵の高句麗瓦について」『早稲田大学會津八一記念博物館

紀要』12, 早稲田大学会津八一記念博物館 119-132 頁

下中邦彦編 1979『世界考古学事典 上・下』, 平凡社

清水昭博 2000「西安寺見聞録」『青陵』106, 奈良県立橿原考古学研究所 8-10 頁

———2005「軍守里廃寺出土軒丸瓦の検討」『MUSEUM』596, 東京国立博物館 19-46 頁。

関口広次 1977a「古代朝鮮における古瓦文様の系譜とその展開(1)」『考古学ジャーナル』136, ニューサイ  
エンス社 19-26 頁

———1977b「古代朝鮮における古瓦文様の系譜とその展開(2)」『考古学ジャーナル』138, ニューサイ  
エンス社 19-21 頁

———1977c「古代朝鮮における古瓦文様の系譜とその展開(3)」『考古学ジャーナル』139, ニューサイ  
エンス社 17-20 頁

———1977d「古代朝鮮における古瓦文様の系譜とその展開(4)」『考古学ジャーナル』141, ニューサイ  
エンス社 23-25 頁

———1977e「古代朝鮮における古瓦文様の系譜とその展開(5)」『考古学ジャーナル』142, ニューサイ  
エンス社 21-27 頁

———1987「瓦当文様雑考-高句麗の瓦当文様を中心として-」『考古学ジャーナル』285, ニューサイエン  
ス社 21-26 頁

関野貞 1914a「満州輯安県及び平壤付近に於ける高句麗時代の遺蹟」『考古学雑誌』5-3・4, 考古学会 1-35  
頁, 1-22 頁; 再録関野博士記念事業会編 1940『朝鮮の建築と芸術』, 岩波書店 263-300 頁

———1914b「朝鮮平壤附近の楽浪高句麗及支那輯安縣附近の高句麗遺蹟」『満州及朝鮮』78, 朝鮮雑誌社  
53-59 頁

———1928a「高句麗の平壤城と長安城に就て」『史学雑誌』39-1 史学会 1-30 頁; 関野博士記念事業会編  
1940『朝鮮の建築と芸術』, 岩波書店に再録 345-370 頁

———1928b「瓦」『考古学講座』9 雄山閣; 関野博士記念事業会編 1940『日本の建築と芸術』, 岩波書店  
に再録 549-820 頁

———1931『東洋史講座』10, 雄山閣

関野貞ほか 1925『楽浪郡時代ノ遺蹟』, 朝鮮総督府

関野貞研究会 2009『関野貞日記』, 中央公論美術出版

銭国祥・郭曉濤・肖淮雁 2009「北魏洛陽城出土瓦の考古学的観察」『古代東アジアにおける造瓦技術の変遷  
と伝播』, 科学研究費補助金(基盤研究 A)研究成果報告書 174-193 頁

## 【た行】

大正大学総合仏教研究所編 2005『靈通寺蹟 - 開城市所在 - 』大正大学出版会

武田幸男 1989『高句麗史と東アジア』, 岩波書店

———2007『広開土王碑との対話』, 白帝社

竹谷俊夫 2008「張撫夷墓埴の観察所見」『王権と武器と信仰』, 同成社 479-488 頁

谷豊信 1987「楽浪郡の位置」『朝鮮史研究会論文集』24, 朝鮮史研究会 23-45 頁

———1989「四・五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察 - 墳墓発見の瓦を中心として - 」『東洋文化研究



- 所紀要』108, 東京大東洋文化研究所 225-307 頁
- 1990「平壤土城里発見の古式の高句麗瓦当について」『東洋文化研究所紀要』112, 東京大東洋文化研究所 47-82 頁
- 1996「漢三国両晋南北朝紀年博の分類と銘文」『東北アジアの考古学 第二「槿城」』東北アジア考古学研究会 233-284 頁
- 2005「平壤遷都前後の高句麗瓦に関する覚書—東京国立博物館所蔵資料の紹介—」『MUSEUM』596, 東京国立博物館 5-18 頁
- 田村晃一 1976「高句麗の山城—大聖山城の場合—」『考古学ジャーナル』121, ニューサイエンス社 93-118 頁;再録田村晃一 2001『楽浪と高句麗の考古学』, 同成社 243-255 頁
- 1982「高句麗積石塚の構造と分類について」『考古学雑誌』68-1 18-41 頁, 考古学会;再録田村晃一 2001『楽浪と高句麗の考古学』, 同成社 257-295 頁
- 1983「高句麗の寺院址に関する若干の考察」『佐久間重男博士退休記念中国史・陶磁史論集』, 中国史・陶磁史論集編集委員会 579-603 頁;再録田村晃一 2001『楽浪と高句麗の考古学』, 同成社 357-380 頁
- 1984「高句麗の積石塚の年代と被葬者をめぐる問題について」『青山史学』8, 青山学院大学文学部史学科研究室 205-225 頁;再録田村晃一 2001『楽浪と高句麗の考古学』, 同成社 297-329 頁
- 1990「高句麗の積石塚」『東北アジアの考古学・天池』, 六興出版 139-164 頁;再録田村晃一 2001『楽浪と高句麗の考古学』, 同成社 331-356 頁
- 2001『楽浪と高句麗の考古学』, 同成社
- 千田剛道 1983「清岩里廢寺と安鶴宮」『文化財論叢』, 奈良国立文化財研究所創立 30 週年記念論文集刊行会 1015-1040 頁
- 1994「瓦からみた古都集安」高句麗都城と山城-中国東北地方における土城と山城の基礎的研究-の第 2 章『青丘学術論集』5, 韓国文化研究振興財団 21-45 頁
- 1996「高句麗・高麗の瓦」『朝鮮の古瓦を考える』, 帝塚山考古学研究所 11-25 頁
- 2011「高句麗都城研究と平壤安鶴宮遺跡」『文学・芸術・文化』22-2, 近畿大学文芸学部 69-80 頁
- 2012「高句麗の前期平壤城と清岩里土城」『文学・芸術・文化』23-2, 近畿大学文芸学部 25-36 頁
- 2013「集安山城子山城と高句麗中期都城」『文学・芸術・文化』24-2, 近畿大学文芸学部 1-13 頁
- 2015『高句麗都城の考古学的研究』, 北九州中国書店
- 朝鮮古蹟研究会 1938『昭和十二年度古蹟調査報告』, 朝鮮古蹟研究会
- 1940『昭和十三年度古蹟調査報告』, 朝鮮古蹟研究会
- 朝鮮総督府 1915a『朝鮮古蹟圖譜 一』, 朝鮮総督府
- 1915b『朝鮮古蹟圖譜 二』, 朝鮮総督府
- 1918『朝鮮古蹟圖譜 六』, 朝鮮総督府

- 1917『大正五年度古蹟調査報告』,朝鮮総督府
- 1929『高句麗時代之遺蹟 上』,朝鮮総督府
- 1933『永和九年在銘博出土古墳調査報告』,朝鮮総督府
- 著者不明 1931「昭和五年度の古蹟調査」『朝鮮』10, 朝鮮総督府
- 都出比呂志 2005『王陵の考古学』,岩波新書
- 贅元洋 1991「様式と型式」『考古学研究』38-2, 考古学研究会 112-130 頁
- 鳥居龍蔵 1896「高麗種族の紋様」『東京人類学会雑誌』123, 東京人類学会 346-352 頁
- 1910『南満州調査報告』,東京帝国大学
- 敦煌文物研究所編 1982『中国石窟 敦煌莫高窟』第5巻付篇, 平凡社

### 【な行】

- 西谷正 1993「考古学的にみた高句麗研究の現状」『伽耶と古代東アジア』,新人物往来社 101-113 頁
- 永島暉臣慎 1981「高句麗の都城と建築」『難波宮址の研究』7, 大阪市文化財協会 247-260 頁

### 【は行】

- 浜田耕策 1986「高句麗広開土王陵墓比定論の再検討」『朝鮮学報』119・120, 朝鮮学会 59-112 頁
- 1987「高句麗古都集安出土の有銘博」『日本古代中世史論考』, 吉川弘文館 19-42 頁
- 濱田耕作・梅原末治 1934『新羅古瓦の研究』, 京都帝国大学
- 原田淑人・田沢金吾編 1930『楽浪-五官掾王吁の墳墓』, 東京帝国大学文学部
- 藤沢一夫 1961「日鮮屋瓦の系譜」『世界美術全集第二巻日本(二)飛鳥・白鳳』, 角川書店 158-165 頁
- 藤田亮策 1948『朝鮮考古学研究』, 高桐書店
- 藤本強 1994『増補 考古学を考える』, 雄山閣出版
- 保井芳太郎 1932『大和上代寺院志』, 大和史学会
- 方起東 1988「千秋塚・太王陵・將軍塚」『好太王碑と高句麗遺蹟-4、5世紀の東アジアと日本』, 読売新聞社  
225-285 頁

### 【ま行】

- 三上次男 1990『高句麗と渤海』, 吉川弘文館
- 美濃口紀子 1997「熊本博物館所蔵の楽浪・高句麗の瓦博について」『熊本博物館研究館報』9, 熊本市立  
博物館 65-90 頁
- 向井佑介 2004「中国北朝における瓦生産の展開」『史林』87-5, 史学研究会 1-40 頁
- 村田治郎 1968「中国建築に用いられた鬼面紋史概説」『鬼面紋瓦の研究』, 井内古文化研究所 1-15 頁
- 桃崎祐輔 2005「高句麗太王陵出土瓦・馬具からみた好太王陵説の評価」『海の考古学』, 海交史研究会考古  
学論集刊行会編 99-124 頁
- 2009「高句麗王陵出土瓦、副葬品からみた編年と年代」『高句麗王陵研究』, 동북아시아역사  
재단 273-311 頁
- 門田誠一 2006『古代東アジア地域相の考古学的研究』, 学生社
- 2008「高句麗古墳における瓦博使用の方法とその意味」『古代文化』60-3, 古代学協会 56-69 頁

### 【や行】

- 山崎信二 2011 『古代造瓦史-東アジアと日本-』, 雄山閣  
 楊寬著·西嶋定生監訳 1981 『中国皇帝陵の起源と変遷』, 学生社版  
 柳昌煥 2004 「古代東アジア初期馬具の展開」『福岡大学考古学論集 - 小田富士雄先生退職記念-』, 小田富士雄先生退職記念事業会 283-296 頁

## 【ら行】

- 李久海·劉濤·王小迎 2009 「揚州城における近年の出土瓦」『古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播』, 科学研究費補助金(基盤研究 A)研究成果報告書 211-235 頁

## ハングル(가나다라順)

### 【ㄱ】

- 강경구 2005 「新羅의 泗水地方과 前高麗王朝」 『白山學報』 72, 白山學會 83-121 頁  
 강현숙 2005 『고구려와비교해본중국한, 위·진의벽화분』, 지식산업사  
 —— 2007 「고구려고분출토와당의변천연구」 『한국고고학보』 64, 한국고고학회 33-73 頁  
 —— 2010 「中國吉林省集安東台子遺蹟再考」 『한국고고학보』 75, 한국고고학회 170-199 頁  
 경희대학교중앙박물관 2005 『고구려와당』, 경희대학교중앙박물관  
 高麗大學校考古環境研究所 2007 『紅蓮峰第 1 堡壘-發掘調査綜合報告書-』, 高麗大學校考古環境研究所  
 공석구 1998 『高句麗領域擴張史研究』, 학연문화사  
 九宜洞報告書刊行委員會 1997 『한강유역의고구려요새-구의동발굴조사종합보고서』, 구의동보고서간행위원회  
 國立慶州博物館 2000 『新羅瓦埴』, 國立慶州博物館  
 國立文化財研究所 2007 『江華高麗王陵』, 國立文化財研究所  
 국립문화재연구소 2008 『開成高麗宮城-試掘調査報告書-』, 국립문화재연구소  
 國立文化財研究所 2009 『개성고려궁성』, 國立文化財研究所  
 국립부여박물관 1993 『국립부여박물관』, 국립부여박물관  
 國立中央博物館 2006 『고구려무덤벽화-국립중앙박물관소장모사도-』, 國立中央博物館  
 國立中央博物館 2007 『國立中央博物館寄贈遺物 柳昌宗寄贈』, 國立中央博物館  
 吉井秀夫 2001 「日本西日本地域博物館에所藏된高句麗遺物」 『高句麗研究』 12, 高句麗研究會 501-522 頁  
 吉井秀夫·崔英禧 2009 「京都大學總合博物館所藏山田鈺次郎寄贈고구려기와의검토」 『일본소재고구려유물Ⅱ-일제강점기고구려유적조사제검토와關西地域소재고구려유물 1』, 동북아역사재단 78-229 頁  
 김경삼 2006 「안학궁지터에서나온수기와막새무늬에대하여」 『고구려안학궁지조사보고서 2006』, 고구려연구재단 236-242 頁  
 —— 2008 「안학궁지터에서나온수기와막새들의무늬에대한고찰」 『조선고고연구』 1, 사회과학출판사 10-17 頁  
 김일성종합대학 1973 『대성산의고구려유적』, 김일성종합대학출판사  
 —— 1976 『동명왕릉과그부근의고구려유적』, 김일성종합대학출판사

- 1990 『조선유물유적도감 10 고려편(1)』, 조선유물유적도감편찬위원회
- 김진한 2006 「文咨王代の対北魏外交-北魏孝文帝·宣武帝の対外政策과関連하여-」 『한국고대사연구』 44, 한국고대사학회 百七十四頁。
- 金昌賢 2011 『고려개경의편제와궁궐』, 경인문화사
- 金和英 1967 「三國時代蓮花文研究」 『歷史學報』 34, 歷史學會 67-110 頁
- 김희찬 2006a 「고구려연화문와당의형식과변천」 『高句麗研究』 22, 高句麗研究會 195-224 頁
- 2006b 「고구려연화복합문와당의형식과그특성」 『高句麗研究』 23, 高句麗研究會 29-60 頁
- 2008a 「고구려권운문와당연구」 『高句麗渤海研究』 31, 高句麗渤海學會 144-177 頁
- 2008b 「4세기고구려연화문와당의개시연대에대한연구」 『韓國思想과文化』 45, 韓國思想文化學會 108-144 頁
- 2009a 「복합문인동이표현된고구려와당의문화적성격」 『白山學報』 85, 白山學會 25-53 頁
- 2009b 「고구려귀면문와당의형식과변천」 『高句麗渤海研究』 34, 高句麗渤海學會 43-66 頁
- 2009c 「고구려인동문와당의형태와문양변화」 『韓國思想과文化』 50, 韓國思想文化學會 193-223 頁

## 【ㄴ】

노태돈 1999 『고구려사연구』, 사계절출판사

## 【ㄷ】

- 동북아역사재단편 2008 『일본소재고구려유물Ⅰ-일제강점기고구려유적조사재검토와關東地域소재고구려유물 1』, 동북아역사재단
- 2009 『일본소재고구려유물Ⅱ-일제강점기고구려유적조사재검토와關西地域소재고구려유물 1』, 동북아역사재단
- 2010 『일본소재고구려유물Ⅲ-일제강점기고구려유적조사재검토-』, 동북아역사재단

## 【ㄹ】

리광희 2004 「청암동토성에서새로발견된수기와의연대」 『조선고고연구』 1, 사회과학출판사 16-19 頁

## 【ㅁ】

- 朴銀卿 1988 「고려드림새문양의 편년연구」 『고고역사학지』 4, 동아대학교박물관 107-164 頁
- 박정기 2006 「5~6세기高句麗와北魏관계의추이-북위文昭皇后高氏の 등장과관련하여-」 『지역과역사』 19호, 부경역사연구소 91-130 頁
- 白種伍 2003 「高句麗와新羅기와比較研究」 『白山學報』 67, 白山學會 257-291 頁
- 2004 「臨津江流域高句麗평기와研究」 『文化史學』 21 韓國文化史學會 171-217 頁
- 2005 「南韓地域高句麗기와製作方法考察」 『白山學報』 72, 白山學會 347-383 頁
- 2006 『고구려기와의성립과왕권』, 주류성출판사
- 白種伍·申泳文·吳虎錫·吳康錫 2005 『高麗王室寺刹奉業寺』, 京畿道博物館

## 【ㅂ】

- 손수호·최응선편 2002 『평양성, 고구려돌칸흙무덤발굴보고』, 사회과학출판사
- 송계현 2005 「환인과집안의고구려甲冑」 『北方史論叢』 3, 고구려연구재단 155-188 頁
- 송태호 2002 『평양성일대의벽돌칸무덤, 고려무덤, 삼국시기마구에관한연구』, 사회과학출판사

시노하라히로카타 2007 「고구려문자자료의특성」 『고대동아시아세계론과고구려의정체성』, 동북아역사  
재단 124-145 頁

신형식 2003 『高句麗史』, 이화여자대학교출판부

沈光注 2007 「南韓地域出土高句麗기와의特徵」 『경기도의고구려문화유산』, 경기도박물관 163-212 頁  
——2009 「고구려·백제평와의제작기법비교」 『百濟學報』 2, 百濟學會 119-154 頁

### 【오】

양동윤·김주용·한창균 1999 「고구려기와의현미경관찰과 XRD 분석-고구려연구회소장유물을중심으로-」  
『高句麗研究』 7, 高句麗研究會 7-67 頁

尹容鎭·崔兌先·金瑩和 1993 『華山麟角寺』 慶北大學校博物館

이성시 2008 「광개토태왕비의건립목적에관한시론」 『한국고대사연구』 50, 한국고대사학회

——2010 「고구려승려혜자와쇼토쿠태자」 『고대환동해교류사 1 부고구려와왜』 동북아역사재단

李熙濬 2006 「太王陵의墓主는누구인가?」 『한국고고학보』 59, 한국고고학회 74-117 頁

임기환 2009 「고구려의장지명왕호와왕릉비정」 『고구려왕릉연구』, 동북아역사재단 17-45 頁

### 【조】

著者不明 2002 「고구려의가장이른시기의기와」 『조선고고연구』 1, 사회과학출판사 17 頁

著者不明 2007a 「함주군신하리집자리유적발굴보고(1)」 『조선고고연구』 1, 사회과학출판사 30-35 頁

——2007b 「함주군신하리집자리유적발굴보고(2)」 『조선고고연구』 2, 사회과학출판사 36-42 頁

전호태 2000 『고구려고분벽화연구』, 사계절출판사

정호섭 2011 『고구려고분의조영과제의』, 서경문화사

제주문화예술재단 2007 『元堂寺址』, 제주시 제주문화예술재단

鄭仁盛 2010 「대방태수張撫夷墓의재검토」 『韓國上古史學報』 69, 韓國上古史學會 39-69 頁

조선유적유물도감편찬위원회 1990a 『조선유적유물도감 5 고구려편(3)』, 조선유적유물도감편찬위원회

——1990b 『조선유적유물도감 6 고구려편(4)』, 조선유적유물도감편찬위원회

주홍규 2009 「集安지역고구려기와의제작기법과변천-일본소제기와를중심으로-」 『韓國上古史學報』 66  
, 韓國上古史學會 75-105 頁

——2014 「고구려기와의분류와특징에관한일고찰」 『先史와古代』 41, 한국고대학회 73-108 頁

### 【사】

채희국 1964 『대성산일대의고구려유적에관한연구』, 사회과학원출판사

崔孟植 2001 「高句麗기와의特徵」 『高句麗研究』 12, 高句麗研究會 987-1042 頁。

崔盛洛 1990 『珍島龍藏城』, 木浦大學博物館

### 【ㅎ】

韓國土地公社土地博物館 1999 『漣川瓠蘆古壘(精密地表調査報告書)』, 한국토지공사토지박물관

——2006 『漣川瓠蘆古壘(제 2 차발굴조사현장설명회자료)』, 한국토지공사토지박물관  
관

——2007 『漣川瓠蘆古壘Ⅲ-第 2 次發掘調査報告書-』, 한국토지공사토지박물관

——2009 『漣川瓠蘆古壘(제 3 차발굴조사현장설명회자료)』, 한국토지공사토지박물관

관

한인덕 2003 「로암리돌천정벽돌무덤에 대하여」 『조선고고연구』 3, 사회과학원출판사 35-40 頁

中国語(拼音順)

【b】

北京市文物研究所 1989 「北京市拒馬河流域考古調査」 『考古』 3, 科学出版社 205-218 頁

【f】

方起東 1982 「集安東台子高句麗建築遺址의 性質和年代」 『東北考古与歷史』 1, 文物出版社 85-88 頁

富品瑩·吳洪寬 1994 「海城英城子高句麗山城調査記」 『遼海文物學刊』 2, 遼海文物學刊編輯部 12-14 頁

撫順市文化局文物工作隊 1964 「遼寧撫順高爾山古城址調査簡報」 『考古』 12, 科学出版社 615-618 頁

撫順市博物館 1992 「遼寧新賓縣高句麗太子城」 『考古』 4, 科学出版社 318-323 頁

【g】

耿鉄華 1993 「高句麗墓上建築其性質」 『高句麗研究文集』, 延邊大學出版社 98-112 頁

——2007 「集安出土卷雲文瓦当研究」 『東北史地』 4, 吉林省社会科学院 14-24 頁

耿鉄華·伊国有 2001 『高句麗瓦当研究』, 吉林人民出版社

賈洲杰 1977 「內蒙古区遼金元時期的瓦当和滴水」 『考古』 6, 科学出版社 422-425 頁

郭清華 1985 「陝西勉縣老道寺漢墓」 『考古』 5, 科学出版社 429-449 頁

【h】

賀云翱 2004 「南京出土六朝獸面紋瓦当再探」 『考古与文物』 4, 考古与文物編輯部 60-65 頁

——2005 『六朝瓦当与六朝都城』, 文物出版社

黑龍江省文物考古研究所編著 2009 『渤海上京城』, 文物出版社

湖北省文物管理委員會 1965 「湖北均縣“双塚”清理簡報」 『考古』 12, 科学出版社 636-642 頁

黃士斌 1962 「漢魏洛陽城出土的有文字的瓦」 『考古』 9, 科学出版社 484-492 頁

【j】

集安縣文物保管所 1984a 「集安高句麗國內城址的調査与試掘」 『文物』 1, 文物出版社 47-54 頁

——1984b 「集安縣上、下活龍村高句麗古墓清理簡報」 『文物』 1, 文物出版社 64-70 頁

集安市博物館 2004 「集安通溝古墳群禹山墓区 2112 号墓」 『北方文物』 2, 北方文物雜誌社 29-35 頁

吉林省博物館 1961 「吉林輯安高句麗建築遺址的清理」 『考古』 1, 科学出版社 50-55 頁

吉林省博物館輯安考古隊 1964 「吉林輯安麻線溝一号壁画墓」 『考古』 10, 科学出版社 520-528 頁

吉林省文物志編委會 1983 『集安縣文物志』, 吉林省文物志編委會

吉林省文物工作隊 1983 「吉林集安長川二号封土墓發掘紀要」 『考古与文物』 1, 考古与文物編輯部 22-27 頁

吉林省文物考古研究所·集安市博物館 2002 『通溝古墳群 1997 調查測繪報告』, 科学出版社

——2004a 『集安高句麗王陵-1990~2003 年集安高句麗王陵調查報告-』, 文物出版社

——2004b 『國內城-2000~2003 年集安國內城与民主遺址試掘報告-』, 文物出版社

—————2004c 『丸都山城-2001~2003 年集安丸都山城調查試掘報告-』, 文物出版社

—————2005 「通溝古墓群禹山 JYM3319 号墓發掘報告」『東北史地』6, 吉林省社会科学院 19-31 頁

—————2009 「集安禹山 M2112 墓室清理報告」『吉林集安高句麗墓葬報告集』, 科学出版社 292-299 頁

吉林省文物考古研究所·延邊朝鮮族自治州文化局·延邊朝鮮族自治州博物館·和龍市博物館 2007 『西古城』, 文物出版社

吉林市博物館 1993 「吉林省蛟河市七道河村渤海建築遺址清理簡報」『考古』2, 科学出版社 134-140 頁

九江市博物館 1986 「江西九江黃土嶺兩座東晉墓」『考古』8, 科学出版社 731-733 頁

### 【1】

遼寧省文物考古研究所編 2002 『三燕文物精粹』, 遼寧人民出版社

遼源市文物管理所 1994 「吉林遼源市龍首山城内考古調查簡報」『考古』3, 科学出版社 221-230 頁

梁志竜 1992 「桓仁地区高句麗城址概術」『博物館研究』1, 博物館研究編輯部 64-69 頁

李殿福 1980 「集安高句麗墓研究」『考古學報』2, 科学出版社 163-185 頁

—————1984 「集安卷雲文銘文瓦当考弁」『社会科学戰線』4, 社会科学戰線雜誌社 67-75 頁

李科友 1987 「江西九江縣發現六朝尋陽城址」『考古』7, 科学出版社 619-621 頁

林至德·耿鉄華 1985 「集安出土的高句麗瓦當其年代」『考古』7, 科学出版社 644-653 頁

### 【n】

南波 1976 「江蘇句容西晋元康四年墓」『考古』6, 科学出版社 東文研 396-397 頁

南京市博物館 2002a 「南京殷巷西晋紀年墓」『文物』7, 文物出版社 11-14 頁

—————2002b 「南京北郊東晋温嶠墓」『文物』7, 文物出版社 19-33 頁

—————2007a 「南京仙鶴山孫吳、西晋墓」『文物』1, 文物出版社 22-34 頁

—————2007b 「南京江寧上湖孫吳、西晋墓」『文物』1, 文物出版社 35-49 頁

### 【s】

陝西周原考古隊 1981 「扶風召陳西周建築群址發掘簡報」『文物』3, 文物出版社 10-22 頁

宿白 1952 「朝鮮安岳所發現的冬壽墓」『文物參考資料』1, 文物出版社 101-104 頁

### 【t】

佟達 1994 「新賓五龍高句麗山城」『遼海文物學刊』2, 遼海文物學刊編輯部 18-24 頁

大理州文物管理所 1988 「雲南大理大展屯二号漢墓」『考古』5, 科学出版社 449-456 頁

大原市文物考古研究所 2005 『北斎の徐顯秀墓』, 大原市文物考古研究所

### 【w】

王銀田·曹臣明·韓生存 2001 「山西大同市北魏平城明堂遺址 1995 年的發掘」『考古』3, 科学出版社 26-34 頁

王蓮瑛 1995 「余姚西晋太康八年墓出土文物」『文物』6, 文物出版社 40-41 頁

王志高·馬濤 2007 「論南京大行宮出土的孫吳雲紋瓦当和人面紋瓦当」『文物』1, 文物出版社 78-93 頁

- 王志剛 2009 「集安禹山 540 号墓清理報告」『北方文物』1, 北方文物雜誌社 20-31 頁
- 王增新 1955 『文物參考資料』「遼陽三道壕發見的晉代墓葬」11, 文化部文物局 37-46 頁
- 王承禮·韓淑華 1964 「吉林輯安通溝第十二号高句麗壁画墓」『考古』2, 科学出版社 67-72 頁
- 魏存成 1987 「高句麗積石墓的類型和演變」『考古學報』3, 科学出版社 321-338 頁
- 魏正瑾·易家勝 1983 「南京出土六朝青磁分期探討」『考古』4, 科学出版社 347-353 頁

#### 【x】

- 辛癸等 1997 「錦州前燕李廆墓清理簡報」『文物』6, 文物出版社 42-46 頁
- 熊伝新 1981 「湖南湘陰縣隋大業六年墓」『文物』4, 文物出版社 39-43 頁
- 徐家國 1989 「遼寧新賓縣永陵鎮漢城址調查」『考古』11, 科学出版社 1049-1051 頁
- 徐州市博物館 1997 「江蘇徐州市花馬庄唐墓」『考古』3, 科学出版社 40-49 頁
- 許玉林 1987 「遼南地区花紋磚墓和花紋磚」『考古』9, 科学出版社 826-834 頁

#### 【y】

- 楊永·芳楊光 1994 「岫岩境內五座高句麗山城調查簡報」『遼海文物學刊』2, 遼海文物學刊編集部 8-11 頁
- 姚家港古墓清理小組 1983 「湖北枝江姚家港晉墓」『考古』6, 科学出版社 512-516 頁

#### 【z】

- 張福有 2004 「集安禹山 3319 号墓卷雲文瓦当銘文識別」『東北史地』1, 吉林省社会科学院 39-44 頁
- 2007 『高句麗王陵統監』, 香港亞州出版社
- 張福有·孫仁傑·遲勇 2007 『高句麗王陵通考』, 香港亞州出版社
- 章金煥 2007 『瓷之源—上虞越窑』, 浙江大学出版社
- 鎮江博物館 1984 「鎮江東吳西晉墓」『考古』6, 科学出版社 528-545 頁
- 中国社会科学院考古研究所 1996 『北魏洛陽永寧寺』, 中国大百科全书出版社
- 中国社会科学院考古研究所、洛陽漢魏城隊 1995 「北魏洛陽永寧寺西門遺址發掘紀要」『考古』8, 科学出版社 698-701 頁
- 中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊 1973 「漢魏洛陽城一号房址和出土的瓦文」『考古』4, 科学出版社 209-217 頁
- 中国社会科学院考古研究所、洛陽漢魏故城工作隊 1997 「河北臨漳縣鄴南城遺址勘探与發掘」『考古』第 3 期, 科学出版社 27-32 頁
- 中国敦煌壁画全集編集委員会編 2002 『中国敦煌壁画全集 2 西魏』, 天津人民美術出版社



高句麗の瓦は高句麗の遺跡の中で最も出土量が多く、その中には年代が特定できる紀年銘があるものや周辺の諸王朝のものと共通する単位紋様の要素を持っているもの、また、高句麗独特の紋様構成及び製作技法が確認できるものがあるため、年代を測る尺度としての意味をもつのみならず、当時の高句麗を巡る国際状況を知り得る一つの手掛かりになる遺物として重要である。

しかし、高句麗の瓦に関する既往の研究は以下のような問題がある。(一)高句麗の瓦であることが判断できる明確な基準が提示されていないため、集成資料のみならず発掘調査により出土したものでさえ、研究対象として扱うことが難しい。また、先行研究では取り扱った資料が高句麗の瓦であることを明らかにした研究が少ない。(二)紀年銘が確認できる高句麗の瓦や古墳出土の高句麗瓦の絶対年代について、研究者によっては意見の違いがあり、一致した見解に至っていない。(三)高句麗の軒丸瓦の場合、個別の型式ごとに編年研究が行われており、出土地域や型式を網羅して各軒丸瓦における共通の紋様要素の変化を分析した研究が見当たらない。(四)主に紋様のみを分析し、瓦の年代を論じた研究が多く、時期判断の材料として用いることができる製作技法などの要素を取り入れて検討した研究が見当たらない。(五)時期判断が可能な周辺地域や諸王朝の瓦と高句麗の瓦との詳しい年代比較が欠けている。

以上のような先行研究の問題を踏まえて、本研究は集安地域と平壤地域から出土した高句麗の瓦の一つの空間的枠組みにおいて捉える。今まで高句麗の瓦として報告された三千点余りの資料の中から、高句麗の瓦と判明できる資料を選別し、紀年銘、紋様、製作技法(主に接合技法)を中心に編年を行う。その編年に基づき、高句麗遺跡の造営時期や被葬者問題、高句麗における瓦の変遷がどのような歴史的経緯で行われたのかを論じたものである。本研究における主な研究成果は以下の通りにまとめることができる。

序章では、高句麗の瓦に関する調査報告と先行研究を概観し、その研究を行う必要性や研究で取り組むべき課題を提示した。

第一章では、報告された実物資料の中で高句麗瓦を同定するための三つの条件を提示した。その条件とは(一)高句麗の古墳から出土したもの、(二)高句麗と関連性が認められる銘文があるもの、(三)高句麗の瓦と判断できる資料と同型の紋様や製作技法が確認できるものである。これらに基づき、高句麗の瓦といえる研究対象を抽出することができる。その結果、高句麗の瓦は軒丸瓦・平瓦・丸瓦・弦月瓦・鳥衾瓦・背瓦・面戸瓦など、形態別には七種類の瓦類があり、軒丸瓦は三十四の型式に至る。これにより高句麗の建物の屋根は様々な瓦により覆われていたことを指摘できた。

第二章では、三十四の型式の高句麗軒丸瓦を紀年銘・単位紋様の特徴・接合技法などの技術的諸属性を中心に検討し、型式分類を行った。高句麗軒丸瓦の各型式から年代推定が可能な単位紋様の要素を抽出し、年代が確認できる周辺地域や諸王朝の遺物との比較により実年代について論じている。それを踏まえて型式分類をもとに構築した各高句麗軒丸瓦の相対編年の検証を試みた。その結果、高句麗

における軒丸瓦の製作開始は三世末まで遡り、最も早い時期に作られた卷雲紋軒丸瓦は三世第四四半期から四世紀第三四半期までに集安地域の都城遺跡や巨大積石塚に使用されたものであることを明らかにした。次に四世紀第四四半期からは、集安地域で作られ初めた輻線蓮華紋軒丸瓦が、平壤への遷都を契機として平壤地域でも五世紀第二四半期から作られようになり、六世紀第二四半期まで続けて作られたことを明らかにした。主に輻線蓮華紋軒丸瓦のみが作られた五世紀第三四半期とは異なり、五世紀第四四半期以後から六世紀にかけて様々な種類の軒丸瓦が作られるようになることを明らかにすることができた。今までの先行研究ではほとんど年代特定ができなかった三十型式以上の高句麗の軒丸瓦の新たな年代や初めての年代特定について論じることができた。

第三章では、第二章で検討した軒丸瓦の編年に基づき、高句麗遺跡の造営時期や被葬者問題についての検討を試みた。国内城はもっぱら高句麗中期の王城として平壤遷都以前の高句麗史を究明するうえで重要視されていたが、平壤遷都以後の六世紀にも軒丸瓦を用いる建物があり、旧都の王城が平壤遷都以後にも修理(修築)されていたことを明らかにした。また、既往の研究では四世紀に造営された遺跡とされる東台子遺跡は軒丸瓦を用いた建物があった時期がおおむね六世紀第二四半期以後のことであり、六世紀第三四半期以後にも建物の修理(修築)が行われていたものと結論づけた。高句麗中期の都城の背後山城として知られている丸都山城は出土した軒丸瓦に六世紀第一四半期まで遡るものが見当たらないため、軒丸瓦が葺かれた建物が初めて建てられた時期を六世紀第二四半期以後と推定できる。平壤遷都以前には瓦葺の建物は丸都山城には存在せず、平壤遷都以後も高句麗の山城として機能していたものと論じられる。高句麗が平壤に遷都する以前に瓦を製作していたとする説については、平壤遷都以前には瓦葺の高句麗の建物は存在しなかったと論じた。大城山城は、今まで考古資料を用いた造営時期の想定が困難であったが、軒丸瓦の編年から五世紀第三四半期に築造されはじめ、六世紀にかけて建物の修理(修築)が行われたと論じた。大城山城が高句麗後期都城の背後山城として長く機能していたことを確認できた。清岩里寺址は五世紀第四四半期以後に造営された金剛寺の跡であることが文献資料だけではなく、軒丸瓦からも論じられる。また、元五里寺址は六世紀第四四半期には造営されていたことを明らかにした。定陵寺址は六世紀第一四半期以後からの造営が始まり、六世紀第三四半期にも建物の修理(修築)が行われていたと論じ、この遺跡と深いかわりがあると想定される伝東明王陵の築造年代も定陵寺址の年代と同様であり、その被葬者を文咨王と推定した。

禹山三三一九号の造営年代は、既往の主な研究とは異なり三世第四四半期であり、古墳の被葬者を特定人物と断定することができないこと、また、高句麗積石塚における軒丸瓦の使用開始が既往の主な研究とは異なることを明らかにした。西大塚は四世紀第二四半期に造営された美川王陵であり、四世紀第三四半期に造営された千秋塚の被葬者は故国原王もしくは小猷林王、四世紀第四四半期に造営された太王陵は故国壤王陵、五世紀第一四半期に造営された將軍塚は広開土王陵、五世紀第四四半期に造営された漢王墓は長寿王陵であると論じた。また、禹山九九二号や麻線二一〇〇号、禹山二一一二号は既往の研究とは異なり、王陵ではないことを明らかにした。

安鶴宮遺跡における造営時期の判断は、軒丸瓦の比較検討により既往の前期平壤城や高句麗末期の遺跡と判断することは難しく、高句麗滅亡以後から高麗成立以前のある時期に造営されたと論じた。

第四章では、高句麗軒丸瓦の編年を踏まえ、高句麗の丸瓦は縄紋の叩き痕跡を残す手法から無紋にする手法へ変化するが、丸瓦とは異なって平瓦は四世紀以後も両方の手法が併存することを明らかにした。また、広端部の先端に紋様が施された平瓦は集安地域の古墳のみで用いられたものであり、既往の研究とは異なって指頭紋がコイル紋より早い時期のものと判断した。その他にも、平瓦の広端部に三角紋・四角紋・コイル紋などを施した製法が高句麗の独自の造瓦技法であることを論じた。軒丸瓦が出土せず、平・丸瓦のみ出土する麻線二三七八号、山城下三六号、禹山二一〇号、七星山八七一号などの積石塚の造営年代が主に三世紀第三四半期以前であると論じた。また、臨江塚や七星山二一〇号の造営時期が主に三世紀後期頃であり、その被葬者が烽上王や西川王の可能性が高いと判断した。禹山五四〇号の造営時期は五世紀第二四半期になる。高句麗の積石塚には墓上建築物があり、高句麗の古墳から出土する瓦は墓上建築物の屋根を覆うためのものであることを面戸瓦をあげて論じた。

第五章では、高句麗瓦の変遷についてⅠからⅤ段階までの区分を行った。その上で、各段階における高句麗瓦と周辺地域の遺物に類似する技術的属性が確認できる歴史的経緯を論じた。高句麗瓦Ⅰ段階は高句麗における造瓦開始期であり、軒丸瓦は作られず、平・丸瓦のみを製作する段階である。高句麗瓦Ⅱ段階は軒丸瓦の製作開始期であり、外来的な紋様上の属性に高句麗の独自の要素が加わり始める段階ともいえる。高句麗瓦Ⅲ段階はもっぱら輻線蓮華紋軒丸瓦のみが作られた段階であり、卷雲紋の伝統が解体され、輻線蓮華紋という新たな要素に再編成される。高句麗瓦Ⅳ段階は輻線蓮華紋軒丸瓦の製作から抜け出し、最も多くの種類の軒丸瓦が作られるようになった段階である。高句麗瓦Ⅴ段階は高句麗瓦Ⅳ段階に続いて多くの種類の軒丸瓦が作られた段階であるが、持続した単位紋様の伝統がなくなり、単純化・小型化するなどの変化が確認できる段階である。

高句麗の瓦の変遷過程の解明は高句麗史を研究するうえで基礎的な作業として重要である。今後、新たに高句麗の瓦と特定できる資料を増やすことにより補完し、より精緻な高句麗瓦の編年を構築していくことができると考える。新たに高句麗の瓦と判断できる資料が増えると、瓦と関連する高句麗遺跡のより詳しい造営時期を探ることが可能になろう。それが東アジア考古学全般において果たす編年軸としての役割は、決して小さなものではなく、文献では知ることのできない当時の国際社会の変化や文化の受容についても把握を容易にすることができるものとする。